

近代オスマン帝国における国家医療の誕生

鈴木真吾

Emergence of State Medicine in the Modern Ottoman Empire

SUZUKI Shingo

1. はじめに

私は2023年2月に慶應義塾大学大学院文学研究科より博士号(史学)を取得し、翌2024年12月に、博士論文を基にした単著『近代オスマン帝国における国家医療の誕生—湾岸都市イズミルの衛生と感染症』(慶應義塾大学出版会、2024年)を上梓しました。本書の刊行から1年半ほどしか経っておらず、まだ鮮度も失われていないと思いますので、本日はまず、この博論本の研究背景、主な主張と意義などを中心に、私の研究をご紹介します。次に本書のなかで十分に検討しきれなかった点や、残された課題として、現在どのような研究を行っているのかをお話し、最後に、私の研究が本学文化社会学部アジア学科での教育にどのように活かせるかについて述べたいと思います。

2. 近代オスマン帝国における国家医療の誕生

研究の背景

本書の問いは、近代オスマン帝国における国家的な医事行政がどのように形成され、それがいかに地方社会にまで浸透していったのかというものです。この国家的な医事行政のことを本書では「国家医療 (state medicine)」と呼んでいて、本書のタイトルにもなっています。これをより大きな歴史的文脈に位置づけると、近代国家が人々の身体や健康にどのように関与するようになったのか、という問題意識があるかと思います。現代では、国や自治体が、その住民たちの生命や健康に責任を持つことは自然なこととして受け入れられていますが、歴史的にはそれほど古いことではありません。ではオスマン帝国という国のなかで、こういったタイミングで、どういう背景で、どのような形で、「国家医療」が出現したのかという問いが本書の根底にあります。その意味で本研究は、近代という時代の特徴を、医療という側面から捉える研究と言ってもよいかもしれません。

「近代」という時代の持つ意味は、国や地域によって様々です。オスマン帝国についても様々な意義を付与できるかと思いますが、ひとまずは、列強による帝国主義に対して国家として生き残るための挑戦の時代、それがオスマン帝国にとっての「近代」であったと定義しておきましょう。そのような視点からオスマン帝国の「近代」を論じる際、従来の研究史のなかでは、例えば立憲政治の導入や軍制改革、ナショナリズム、資本主義世界経済への編入の問題などがよく研究されてきたわけですが、私はそれらを支える基盤としての人口と健康の問題に着目しました。国民軍を形成するのも、中央集権化を支える財源となる税を納めるのも住民ですので、国家の基盤となる「健康な国民」を生み出すために、どのような政策が展開されたかという観点から、近代国家を論じようとしたわけです。

本書の問いである「国家医療はいかに形成され、地方社会へ浸透したのか」という問題も、こうした関心から設定されたものです。近代に、ほかならぬ国家が住民の身体や健康に積極的に関与するようになったことは、オスマン帝国に限らず世界各地で見られた共時的な現象です。私があえて「国家医療」という言葉を用いたのも、オスマン帝国を特殊な事例としてではなく、近代世界に共通する現象の一つとして捉えたいと考えたからです。

以上の問題を検討するにあたり、具体的に本書では、医事行政および地方行政に関わる法制度の整備、地方自治体による公衆衛生行政および住民の関与、19世紀末から20世紀初頭にかけての二度のコレラ流行への対応、医事行政の中核を担った市行政医の職務^{＊1}、そして医療の専門職化などの問題を取り上げています。

そのなかでも特に、エーゲ海に面する西アナトリアの港町イズミルとその周辺地域に焦点をあて、地方の側から「国家医療」を見るという点が一捻り加わっているところかと思います。ここまでの話では、国力増強のために中央政府が国家的な医事行政を整備し、住民の健康に積極的に関与するようになったという問題になるのですが、そうするとどうしても「上からの近代化」という筋の研究になります。私の研究では、むしろ地方の側の史料を使って、地方社会の側から「近代国家」を照射してみようと試みた点に特徴があるかと思います。史料として、主にイズミルで刊行されたオスマン・トルコ語の地方新聞を用い、中央政府の政策を追うだけでなく、それらが地方社会でどのように受け止められ、実践されたのかを明らかにすることを目指しました。

本書の主張

本書の主な主張は以下のようなものです。第一に、1867年の文民医学校の設立、1871年の「医事行政法」を嚆矢として、オスマン帝国では国家的な医療・衛生行政の整備および普及が進んだということです。もちろん文民医学校や「医事行政法」自体が従来の研究のなかで触れられていないわけではないのですが、それらにオスマン帝国の「国家医療」の形成という枠組みを与え、地方での実践から実証的に明らかにした点に意義があると考えています。

第二に、それが、各地に設立された自治体（ベレディエ belediye）と、そこへ任命・雇用された市行政医を軸とするものであったということです。もともとオスマン帝国の近代的医学校といえは1827年設立の軍医学校が先にあり、そこでは軍医が育つのですが、一般の人々を診

る医師の不足が問題となっていました。そこで、各地方自治体などに任命される官医、つまり公務員としての医者を育てるための医学校が 1867 年に設立されました。それに呼応して 1871 年に、官医の職について定めた「医事行政法」が制定され、オスマン帝国では国家的な医事行政の整備が進んだのです。各地で設立された自治体、例えば今の神奈川で言えば厚木とか平塚とかをイメージしていただければいいと思いますが、そこに医者が任命・雇用されて、医事行政の中核を担うという制度設計になっていました。

第三に、近代オスマン帝国における医事行政の整備は、「国家医療」の誕生という世界史的な展開に位置づけることができるということです。本書は序章が 40 頁超とかなり長くなってしまったのですが、同時期のヨーロッパや日本の医療史研究を参照しながら、世界共時的な現象として「国家医療」を捉えようとしています。

第四に、オスマン帝国の「国家医療」は、単に中央集権的な国家が推し進めた政策というだけでなく、地方社会との相互関係のなかで形成されたということです。地方新聞に見られる自治体への清掃の要請や批判、上水道延伸の住民キャンペーン、あるいは医療を受ける側の医療選好や、それに対する「正規の」医師たちの批判が医師の専門職化を促したことなども、重要な役割を果たしました。

本書の意義

本書の意義についても簡単に申し上げておきます。まず、近代オスマン国家の形成を、従来の視点とは異なり、医療・衛生の問題から捉え直したことです。同時に、非西洋地域の近代研究、医療史研究に新たな視点を提供したというのも重要かと思います。私はアジア学科の教員なので、アジアという観点から話をいたしますと、近代インドの国家医療についてはデイヴィッド・アーノルドによる帝国医療史研究²⁾、中国についても飯島渉先生のご研究など³⁾、研究の蓄積が進んでいます。他方、中東・西アジアについては、医療史的側面からの研究があまり進んでいませんでした。例えばアジアを対象として、近代の医療・衛生の諸問題を比較史的に扱う論集のなかでも、やはり西アジアは含まれていません⁴⁾。ですので、研究上の空白であった西アジアの医療史という点で、重要な貢献となっていると思います。

また、中央からではなくて、地方から近代国家の形成を分析したということも、オスマン帝国史研究の文脈では意義があることだと思います。かつてオスマン史研究では、日本史でいうと「黒船襲来」に対するリアクションとして政策を行ったというような、受動的な歴史観が支配的であったのですが、近年ではオスマン帝国の主体性に着目する研究が増えてきました⁵⁾。それ自体は評価されるべきことなのですが、他方、オスマン帝国の主体性に着目する研究は、主に中央政府がどういった意図で、どのような政策を進めたかに注目するので、そのなかでは地方社会は政策の対象として客体化されてきた側面があります。それに対して私の研究は、地方の史料を用い、なかでも「市行政医」という地方の主体のエージェンシーに着目しつつ、中央政府の政策を地方から照射した点に意義があるかと思います。

また、これは当時あまり意識していませんでしたが、オスマン帝国の市行政医は、国によって育成され、地方自治体に任官された公務員なので、本書は官僚研究の側面もあると思います。

最近の世界史的な官僚研究は、官僚制という制度自体よりも、それを構成する人材に着目する傾向がありますが、私の研究も、医事行政という制度を成り立たせている個人に注目している点に面白さがあると思っています。

最後に、以上の結果として、近代国家の形成を「国家から社会へ」という、いわゆる上からの近代化的な見方ではなくて、国家、医療専門職、そして住民の間の相互作用の過程として描き出したということが本書の大きな特徴であると考えています。

3. 市行政医のプロソポグラフィ

次に、これまでの研究を踏まえて、現在どのような研究をしているかお話しします。著書のなかでやり残したことは多くあるのですが、その一つが、市行政医になった人がそもそも何者で、どこから来たのかという疑問です。本書では市行政医が、国家と地方社会を媒介する重要な存在であったことを明らかにしましたが、その人たちがそもそもどういう人なのかがわからないという問題は残ってしまいました。

イズミルの市行政医がどのような人かというのはおおよそわかっています。例えばこのムスタファ・エンヴェルという人物は、イズミル市行政医を経て、最終的にイズミル慈善病院長、つまり地方公立病院の院長になる重要な人物です（図 1）。彼はイズミルにとって重要な人物であったので伝記も残っており、アイドゥン州のビルギ村の名家出身の穆斯林、父親の職業はイスラーム法廷の書記で、教育としては文民医学校を卒業しているなど、そういったプロフィールはわかります⁶。しかしこのプロフィール、つまりアナトリア出身の穆斯林、親の職業はイスラーム法廷書記であるというような属性がどれほど全体を代表しているものなのかはわかりません。例えばバルカン半島の市行政医を調べたら、実はバルカン半島出身者が多いとか、実はギリシャ正教徒が多いとか、そうしたこともあり得るかと思います。つまり個々の事例について、その人がどのような人かというのは、イズミルとその周辺地域については、それなりに明らかになっているのですが、それが全体を代表する事例かどうかはわからないという問題があり、それを明らかにする研究を最近は進めています。



図1 ムスタファ・エンヴェル

一言で言えば、プロソポグラフィ研究です⁷⁾。日本語では集合的伝記研究とも呼ばれます。オスマン帝国では 1879 年に官僚人事の体系的な管理システムが導入され、本人記入の履歴書 (tercüme-i hal varakası) や卒業証書などの関連文書をまとめた個人別の人事ファイル (sicill-i ahval dosyaları) の内容を要約し、その後の異動などを書き加えた人事記録簿 (sicill-i ahval defterleri) と呼ばれる史料が残っています。公務員は履歴書の提出を義務付けられ、約 5 万人の文官の履歴が残されていると言われます。そこには自分の名前、親の名前、親の職業、宗教・宗派、生年、生誕地、教育歴、習得言語という出自の情報が並び、その後職歴が列挙されます (図 2)。このなかに医者履歴も多く含まれています。トルコ共和国大統領府オスマン文書館に所蔵されるこの膨大な史料群から医師の履歴を抽出し、300～400 人分を収集・読解しデータを集める作業をまず行っています。

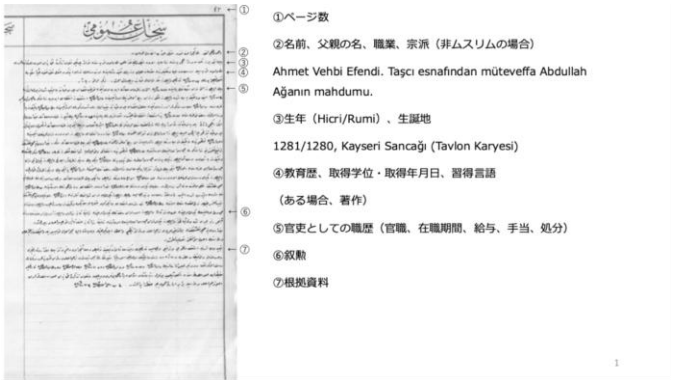


図2 人事記録簿の一例

集めたデータを例えば医師免許取得時期と医学教育背景、医師免許取得時期と出身地域、出

第 16 号 (2026 年 9 月)

身地域と宗派、出身地域と父親の職種、宗派と父親の職種、出身地域と初任地の関係といったようにクロス集計・分析をすることで、ある程度の傾向が見えてくることが期待されます。例えば全体に対してどれほどの割合の非ムスリムがいて、そのなかでギリシャ正教徒はどの程度か、あるいは、ある地域出身はアルメニア正教徒が多い、父親の職種の偏りが見られるなどです。この分析結果はまだ論文として公表していないのでここで申し上げることはできませんが、このような医師たちの集合的なプロフィールを明らかにする研究を最近では進めています。

また、本研究は近代における社会移動の研究としても位置づけられます。先ほど言及したムスタファ・エンヴェルの父親はイスラーム法廷の書記でしたが、彼の伝記によれば、彼は地元の伝統的なマドラサ（イスラーム学院）で学んだ後「父親の反対を押し切って」上京し、文民医学校の門を叩いたそうです⁸。卒業後イズミルの公立病院の院長職に任ぜられた彼は、半世紀近くにわたり地域医療の発展に貢献し、「イズミル最初のトルコ人医師」として記憶されています⁹。この事例は近代に普及した公教育を通じて、従来の国家体制の外にいた人々が、膨張する官僚機構の末端を担う構成員となった社会移動の好例です。同時に地方出身者がイスタンブールで近代医学を修め、行政医として地元に戻って国家医療普及のエージェントになるというパターンも示しています。したがって、市行政医の出身階層や出身地を網羅的に調査し、近代官僚制国家を支えた医系官吏の出自的特質を数量的に明らかにすることは、社会移動という観点から、近代社会の特質を明らかにすることにもつながります。

4. 本学との教育との関わり—普遍と特殊

文化社会学部アジア学科の教員として、アジア学科で学ぶ意義の一つは、自分たちとは異なる歴史や文化を持つ社会を理解すること、いわゆる異なる他者としてのアジアを学ぶということであり、それがアジア学科の教育の一つの柱となっているとは思いますが、他方で異文化理解をもう少し深く考えると、それだけではないのかなという気もしています。

私の著作のタイトルに「国家医療」という用語をあえて用いることで、同時代他地域と共時的な現象として近代オスマン帝国の医事行政を捉えようとしたという話をさせていただきました。つまりオスマン帝国に固有なもの、特殊性というだけではなく、近代という時代に広く見られた普遍的な問題として捉えていくという立場をとっています。遠く離れた異国の社会であっても、実は私たちの社会と共通する問題に直面していることに気づくこともまた、地域研究の重要な意義なのではないかと考えています。

オスマン帝国という国は学生にとって非常に遠い存在ではありますが、近代オスマン帝国が、近代日本と同じような課題に直面していたこと、例えば国民国家の形成や国民統合の問題、そのなかでのスルタンや天皇の役割など、共通する部分も多く見られます。医療史の文脈では例えば帝国医療の問題があります。帝国医療とは、宗主国による統治が植民地社会の衛生や健康改善につながったとする見方を批判し、むしろ医学知や医療が植民地統治を正当化し、その手段となったことを指す概念です。この視点から見ると、例えば近代日本のアジアへの進出は、近代オスマン帝国によるアラブ地域への支配強化とパラレルな関係にあると見るができる

かもしれません。どちらも西洋からは「オリエン特」と位置づけられながらも、「文明化のミッション」というオリエンタリズム的世界観を自ら内面化し、内なる他者の征服に向かう原動力としたと見ることができます。そういった異なる他者というだけではなく、普遍的な側面を持つものとして見るということも教育に反映させていければよいと考えています。

註

- ¹ 市行政医 (belediye tabibi) とは、オスマン帝国各地に設置された地方自治体に任命・雇用された公医のこと。オスマン帝国では 1867 年に文民医学校 (Mekteb-i Tıbbiye-i Mülkiye) が設立され、ここで育った医師たちは主に市行政医として各地に任命される体制が整備された。本書ではイズミルとその周辺地域を事例にその職務を詳述している。
- ² デイヴィッド・アーノルド『身体の植民地化—19 世紀インドの国家医療と流行病』みすず書房、見市雅俊訳、2019 年。
- ³ 飯島渉『ペストと近代中国—「衛生」の制度化と社会変容』研文出版、2000 年。
- ⁴ 例えば、見市雅俊ほか編『疾病・開発・帝国医療—アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会、2001 年；永島剛・市川智生・飯島渉編『衛生と近代—ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』法政大学出版局、2017 年。
- ⁵ 研究動向として、秋葉淳「近代帝国としてのオスマン帝国—近年の研究動向から」『歴史学研究』798 号、2005 年、22–30 頁。
- ⁶ Cemil Şerif, *Merhum Şeyhületibba Operatör Mustafa Enver Beyin Hatıraları*, İzmir: Bilgi Matbaası, 1933.
- ⁷ ある組織や人の集まりについて成員個々の略歴を要素 (社会的出自、宗教宗派、出身地、学歴、職業、収入・資産、婚姻関係、政治活動、思想信条...など) ごとに数値化・類型化する研究手法のこと。それを集積し、集団としてのプロフィールを浮かび上がらせる。例えば議員研究では、政治党派により出自や資産がどう異なるかなどが検討できる。詳しくは以下の文献を参照。長井伸仁「プロソグラフィとミクロの社会史—フランス近現代史研究の動向から」『思想』1032 号、2010 年、143–159 頁。
- ⁸ Şerif, *Merhum Şeyhuletibba*, p. 7.
- ⁹ M. Kâmil Dursun, *İzmir Hatıraları*, Ünal Şenel (ed.), İzmir: Akademi Kitabevi, 1994, p. 8.

引用文献

- 秋葉淳 (2005) 「近代帝国としてのオスマン帝国—近年の研究動向から」『歴史学研究』798 号、22–30 頁。
- アーノルド、デイヴィッド (2019) 『身体の植民地化—19 世紀インドの国家医療と流行病』みすず書房、見市雅俊訳。
- 飯島渉 (2000) 『ペストと近代中国—「衛生」の制度化と社会変容』研文出版。
- 鈴木真吾 (2024) 『近代オスマン帝国における国家医療の誕生—湾岸都市イズミルの衛生と感染症』慶應義塾大学出版会。

長井伸仁 (2010) 「プロソポグラフィとミクロの社会史—フランス近現代史研究の動向から」『思想』1032号, 143–159 頁.

永島剛・市川智生・飯島渉編 (2017) 『衛生と近代—ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』法政大学出版局.

見市雅俊ほか編 (2001) 『疾病・開発・帝国医療—アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会.

Cemil Şerif (1933). *Merhum Şeyhületibba Operatör Mustafa Enver Beyin Hatıraları*. İzmir: Bilgi Matbaası.

M. Kâmil Dursun (1994). *İzmir Hatıraları*. Ünal Şenel (ed.), İzmir: Akademi Kitabevi.